

50年の時を経て 2005年鉄人は 実在する

大和 信夫 (ヴイストン(株))

完全自律型ヒューマノイドロボット「VisiON(ヴィジョン)」開発チーム、「TeamOSAKA(チームオオサカ)」¹に託された次なるミッション。それは「鉄人28号」の開発だった。映画「鉄人28号」とタイアップし、(株)サンバックおよび三和電子機器(株)との連携で2004年8月から始まった開発の成果は2005年3月3日(木)大阪駅前第3ビル内にあるロボットラボラトリー²にて報道発表が行われ(図1)、同日から予約注文を開始した。他に類を見ない二足歩行型キャラクターロボットの開発の経緯、商品そして「鉄人28号」に寄せる思いを紹介する。



主要開発メンバーの紹介 (氏名：簡単な紹介：所属企業・団体：担当)

かねい すずむ 金井 進	「鉄人28号」の誕生と同じ1956年生まれ。鉄人は子どもの頃からの夢だったそうで、今回の企画の仕掛人：株式会社サンバック：商品企画担当
たかはし ともたか 高橋 智隆	米TIME誌「Coolest Inventions 2004」を受賞した「クロイノ」の開発者としても知られるロボットクリエイター：ロボガレージ：ロボット本体の開発総指揮・原型製作
まつむら れお 松村 礼央	昨年夏、ヴイストン社にインターン研修に来たことがきっかけで、その後も引続き修行中：奈良工業高等専門学校：フレーム設計担当
ふかつ まさお 深津 将生	ロボット制御アプリケーションソフト開発の実績多数：ヴイストン(株)：鉄人28号用「ロボビーメーカー」開発担当
ほんど たかひろ 本土 隆裕	電子回路基板設計からソフト開発までをこなす：ヴイストン(株)：CPUボード開発担当
やまと のぶお 大和 信夫	TeamOSAKA監督：ヴイストン(株)：開発総括
そがめ あきら 十亀 明	世界初の学習リモコンの設計者：三和電子機器(株)：ロボット専用プロボ開発担当



「鉄人28号」誕生

今から約50年前の1956年に、月間『少年』で連載が始まった「鉄人28号」は、その後、1963年にテレビアニメーションとしての放映も開始される。リモコンで操縦し、武器を持たない「鉄人28号」は巨大ロボットの原点であり、独特の世界観を持つ。その「鉄人28号」が、2005年3月19日(土)にCG技術を駆使した実写版としてスクリーンに蘇った。そして機を同じくして、二足歩行型ヒューマノイドロボット「鉄人28号」が完成する。

RooBO (ローボ)

ロボカップ参戦用ロボットの開発がスタートしてからというもの、「TeamOSAKA」のメンバー各社にロボットの開発案件や、部品製作をはじめ、ロボット

関連技術の売込みや相談などが毎日のように寄せられるようになった。案件によっては、十分対応が可能なものもあれば不可能なもの、共同開発のパートナーを必要とするものなどさまざまで、チームメンバーだけの対応には限界があることは明確だった。ただ、寄せられる案件が多いことは、潜在的なニーズの存在を裏付けるものであり、メンバーが揃えば対応できることも多くありそうだと判断したことから、なんとかこうした案件をビジネスに繋げる方法はないものかと思案していた。

次世代ロボット開発ネットワーク「RooBO(ローボ)」はこうした問合せに対応できる器を目指し2004年6月23日に「TeamOSAKA」のメンバーが中心となって設立した団体である。財団法人大阪市都市型産業振興センターのロボッ

トラボラトリーに事務局を持ち、設立当初約40だったメンバーは2月末時点で120(団体、個人、アドバイザーを含む)に及ぶ。

設立とあいまって、具体的なテーマに取り組むためのワークグループが形成され個別の活動も逐次スタート。私と高橋氏はそれぞれ「企画グループ」「デザイングループ」に所属して、ロボットビジネスやデザインについての検討を進めていた。

「鉄人28号」プロジェクト始動

「鉄人28号」開発は、「RooBO」の企画グループに金井氏が企画を持ち込んだことから始まる。当時、ヴイストン社は「Robovie-M(ロボビー・エム)」(図2)というロボット組立キット等の製品を製造・販売しており、また「VisiON」が「ロボカップ2004 ジャパンオープン」で総